人々がマスクを着用する理由とは ——国内研究の追試とリサーチクエスションの検証——

榊原 良太 大藺 博記 鹿児島大学

Abstract

Wearing masks is an easy and effective way to prevent infection by COVID-19. In Japan, two studies investigated the reasons why people wear a mask; however, the results were inconsistent. Therefore, the present study reexamined the association between mask wearing and the reasons given for doing so, focusing on the differences in and problems of item wording. The results of both studies were found to be almost reproducible, and there were few problems regarding item wording. Furthermore, it was found that people wear a mask to prevent themselves and others from infection and to conform to other people wearing a mask. We suggest that inconsistencies in the results were due to differences in item wording, and discuss how future research should be conducted.

Key words: COVID-19, mask wearing, double-barreled question

新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19 とする）は、2021 年 2 月現在、依然として世界的流行の最中にあり、国内においても様々な感染予防策が講じられている。中でも、マスク着用は、以前よりその習慣が国内において存在していたこともあり、早くから多くの人々によって取り組まれてきた。マスク着用は、個人単位で取り組むことができる効果的な感染予防策である（e.g., Eikenberry et al., 2020）。一方、その着用の有無が一目でわかることから、ときに未着用者に対する強い非難の目が向けられたり、着用に関する暗黙の規則をめぐる社会的な諍いが生じたりすることもある。マスク着用を促すだけでなく、その着用をめぐる相互理解を高めるような呼びかけを行うためにも、人々がいかなる理由でマスクを着用しているのかについて、明らかにする必要があるだろう。

COVID-19 の流行後、国内では Nakayachi, Ozaki, Shibata, & Yokoi (2020) と Sakakibara & Ozono (2020)において、マスク着用の理由と実際のマスク着用の関連を検証する調査が行われている。Nakayachi et al. (2020)は 2020 年の 3 月末に、Sakakibara & Ozono (2020)は同年の 4 月末および 5 月初旬にかけて調査を実施したが、興味深いことに、両者の知見は必ずしも一致していない。

Nakayachi et al. (2020)では、自己や他者への感染予防という理由はマスク着用と関

連せず、他者への同調に関する項目が、マスク着用と正の関連を有することを示した。一方、Sakakibara & Ozono (2020)では、自己や他者への感染予防という理由は、マスク着用と正の関連を有するが、他者への同調に関する項目は、マスク着用との関連を示さなかった(2つの研究の具体的な項目は付録を参照)。つまり、人々は自己及び他者への感染予防を理由にマスクを着用するのか、それとも他者への同調によってマスクを着用するのかという点において、両者の知見は一致していない。

こうした知見の不一致をもたらした一つの可能性として、両者の調査時期の違いが挙げられる。COVID-19に対する人々の危機感は、緊急事態宣言を境に大きく変化したと考えられるが、Nakayachi et al. (2020)は宣言以前に、Sakakibara & Ozono (2020)は宣言後にそれぞれ調査を実施している。宣言後と比べ、宣言前はそれほど危機感も強くなく、また感染対策も手探りの状況であったため、周囲への同調がマスク着用を促していたが、宣言後に危機感が強まったことで、自己や他者への感染予防という本来的な理由が、マスク着用を促すようになったのかもしれない。

一方、調査時期の違いとは別に、両者において使用された項目の違いが、知見の不一致をもたらしている可能性も指摘できる。例えば、自己の感染予防という理由について、Nakayachi et al. (2020)では「あなたは、マスクを着用することで新型コロナウイルスへの感染を防げると思いませんか」という項目を、Sakakibara & Ozono (2020)では「マスクは、自分が周りからウイルスを移されないために着用している」という項目を用いており、後者において、より回答者自身のマスク着用の理由を強く意識させる表現となっている。また、他者への同調に関しても、Nakayachi et al. (2020)では“perceived norm”として「街中や通勤・通学時にマスクを着用する人を目にすると、自分もつけた方がいいと感じますか」という項目²を、Sakakibara & Ozono (2020)では、規範的影響(Deutsch & Gerard, 1955)を測定していると見られる「マスクは、他の人から冷ややかな目で見られないために着用している」という項目を用いている。つまり、両者は一見、同じようなマスク着用の理由を検証しているが、使用された項目表現にニュアンスの違いが存在し、それが知見の不一致を生じさせていると考えられる。

さらに両者の項目をつぶさに見ていくと、結果にバイアスを生じさせ得る項目表現の存在を指摘することができる。例えば、上述したNakayachi et al. (2020)の同調を測定する項目は、「街中や通勤・通学時にマスクを着用する人を目にすると」という条件のもと、「自分もつけた方がいいと感じますか」という質問が続くが、仮に条件の方を削除すると、単にマスクをつけた方がよいかを問う質問と見なすこともできる。これにより、常にマスクをつけた方がよいと考えている個人は、条件の有無に関わらず、この項目への得点が高くなり、結果として、この項目とマスク着用の得点の関連は、本来よりも高く推定されてしまう可能性がある。これは、ダブルバーレル(e.g., 増田・坂上, 2014)の問題として指摘できるだろう。また、Sakakibara & Ozono (2020)の項目は、いずれも自身のマスク着用の理由を強く意識させる表現となっているため、本来のマスク着用の

理由として社会的に期待される方向へ、回答が歪められているおそれがある。例えば、「自分が周りにウイルスを移さないため」というのは、本来のマスク着用の理由であり、社会的に望ましい回答であると言える。また「自分を守ることが他者を守る」といった啓発が時になされることから、「自分が周りからウイルスを移されないため」という理由も、暗に社会的な期待が反映された項目となり得るだろう。そのため、これらの項目には高い得点がつけられ、結果的にマスク着用との関連が大きくなっている可能性がある。

加えて、Nakayachi et al. (2020)の分析では、年齢、性別、パーソナリティ、COVID-19 以前のマスク着用習慣といった要因が考慮されていないことから、これらを統制した上で同様の結果が再現されるかについても、検証する必要があるだろう。

本研究の目的とリサーチクエスチョン

以上より、本研究では、マスク着用の理由と実際のマスク着用の関連を検証した国内の2つの研究に着目し、それぞれの追試を行い、再現性を確認するとともに、以下のリサーチクエスチョン(RQ)の検証を行う。

1. Nakayachi et al. (2020)の同調を測定する項目は、ダブルバーレルの問題が生じており、マスク着用との関連が実際よりも過剰に推定されているのではないか？(RQ1)
2. Sakakibara & Ozono (2020)の結果は、社会的望ましきによるバイアスが生じており、マスク着用に対する自己の感染予防、他者への感染予防という理由の効果が、過剰に推定されているのではないか？(RQ2)

2つの研究の追試及び上記のRQを検証することにより、人々がいかなる理由によりマスクを着用しているのかが、より明確になると考えられる。

方 法

調査方法および調査対象

2020年9月14日から17日にかけて、クラウドソーシングサービスを利用したオンライン調査を実施した。「Yahoo!クラウドソーシング」の登録者が閲覧できるウェブサイト上に、「新型コロナウイルス感染症に関する調査」というタイトルで調査参加を募集した。調査への参加は任意であること、回答は匿名で行われること、回答を途中でやめられること、回答を完了することで報酬（電子決済で使用可能7円相当のポイント）が得られることを事前に明示し、これらに同意する場合のみ、調査へ参加するよう求めた。Nakayachi et al. (2020)のサンプルサイズ($N=1000$)を基準に、少なくとも1000名分の回答が分析に使用できるよう募集をかけ、1804名からの回答を得た。2つのサテイスフェイス項目(教示文や質問項目を正確に読んでいるかを確認するための項目)に適切な回答ができなかった514名、自身もしくは家族に感染経験のある3名の参加者

をデータから除外し、最終的に 18–80 歳(平均年齢 46.92 歳, 標準偏差 10.57)の 1287 名(男性 721 名, 女性 559 名, その他 7 名)分のデータを分析に使用した³。なお, 本調査は鹿児島大学法文学部研究倫理委員会による承認を受けている。

調査内容

Nakayachi et al. (2020)で使用された項目 マスク着用の理由を問う項目として, “Severity”, “Protection”, “Prevention”, “Impulsion”, “Norm”, “Relief”の 6 項目をそれぞれ用い(変数名は Nakayachi et al. (2020)の表記をそのまま使用), 5 件法(1. 全くそう思わない–5. 非常にそう思う)にて回答を求めた。また, マスク着用の頻度を問う項目として, Nakayachi et al. (2020)と同じ「新型コロナウイルスが騒がれるようになってから, あなたはマスクを着用しましたか。ひとつ選んでください(花粉症対策目的の着用は除きます)」という項目を使用し, 3 件法(1. 全く着用しなかった, 2. 少しは着用した, 3. 頻繁に着用した)にて回答を求めた。

Sakakiara & Ozono (2020)で使用された項目 マスク着用の理由, 目的を問う項目として, Sakakibara & Ozono (2020)と同じ「自己の感染予防」「他者への感染予防」「規範的影響」に関する 3 項目を使用し, それぞれ 7 件法(1. 全くあてはまらない–7. とてもよくあてはまる)にて回答を求めた。また, マスク着用の頻度についても, Sakakibara & Ozono (2020)と同じ「外出時にはマスクを着用している(マスクがない場合は, ある場合を想定してお答えください)」という項目を使用し, 7 件法(1. 全くしていない–7. 絶対にしている)にて回答を求めた。

統制変数としてのパーソナリティ, マスク着用習慣 統制変数として使用する目的から, 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) (小塩・阿部・カトロニ, 2012)を用いて, 外向性, 協調性, 誠実性, 神経症傾向, 開放性を, それぞれ 2 項目 7 件法 (1. 全く違うと思う–7. 強くそう思う)にて測定した。同様に, 統制変数として使用する目的から, COVID-19 流行以前のマスク着用習慣を, 「新型コロナウイルス感染症が問題になる前から, 日常的にマスクを着用する習慣があった」という項目を用いて, 7 件法 (1. 全くあてはまらない–7. とてもよくあてはまる)にて測定した。

ダブルバーレル検証項目 RQ1 のダブルバーレルの問題を検証するため, 「街中や通勤・通学時にマスクを着用する人を目にするか否かにかかわらず, 自分はマスクをつけた方がいいと感じますか」という項目を作成し, 5 件法 (1. 全くそう思わない–5. 非常にそう思う)にて回答を求めた。

社会的望ましさ RQ2 における, 社会的望ましさによるバイアスの問題を検証するため, 谷 (2008)のバランス型社会的望ましさ反応尺度日本語版 (BIDR-J)を用いた。BIDR-J は自己欺瞞と印象操作の 2 因子で構成されているが, マスク着用及びその理由は, 特に印象操作との関連が予想されることから, 本研究では印象操作を測定する 12 項目のみを使用し, 7 件法 (1. 全くあてはまらない–7. 非常にあてはまる)にて回答を

求めた。

なお、本研究では他にもマスク着用に関する項目を測定しているが、本論文の目的および紙幅の都合上、分析結果の報告および考察は行わない。使用した全ての項目とローデータは、Open Science Framework (<https://osf.io/mw6qc/>)にて公開されている。

結 果

Nakayachi et al. (2020)の追試及び RQ1 の検証

マスク着用の頻度を問う Nakayachi et al. (2020)の項目に明確な天井効果が確認されたことから(平均 2.85, 標準偏差 0.42), Sakakibara & Ozono (2020)のマスク着用の頻度を問う項目を使用することとした。まず, Norm がマスク着用の頻度を予測するという Nakayachi et al. (2020)の結果を追試するため, 年齢, 性別, パーソナリティ, COVID-19 以前のマスク着用習慣を Step1, マスク着用の理由に関する 6 つの変数を Step2 に投入した, 最小二乗法を用いた階層的重回帰分析を行った。結果を Table 1 に示す。その結果, Norm はマスク着用の頻度と有意な正の関連を示し($\beta = .317$), 他の変数を統制した上でも Nakayachi et al. (2020)の結果は再現されることが確認された。

さらに, RQ1 を検証するため, 上述の階層的重回帰分析の Step3 にダブルバーレル検証項目を投入した。その結果, ダブルバーレル検証項目はマスク着用の頻度と有意な正の関連 ($\beta = .418$)を示した。Norm の標準偏回帰係数の値は Step2 から低下したものの, 依然として有意な正の関連($\beta = .204$)を示した。

Sakakibara & Ozono (2020)の追試及び RQ2 の検証

まず, 自己の感染予防と他者への感染予防という理由がマスク着用の頻度を予測するという Sakakibara & Ozono (2020)の結果を追試するため, 年齢, 性別, パーソナリティ, COVID-19 以前のマスク着用習慣を Step1, 自己の感染予防, 他者への感染予防, 規範的影響を Step2 に投入した, 最小二乗法を用いた階層的重回帰分析を行った。結果を Table 2 に示す。その結果, 自己の感染予防($\beta = .243$), 他者への感染予防($\beta = .320$)はいずれもマスク着用の頻度と有意な正の関連を示したが, 規範的影響($\beta = .003$)では関連が見られず, Sakakibara & Ozono (2020)の結果が再現された。

さらに, RQ2 を検証するため, 上述の階層的重回帰分析の Step3 に社会的望ましさ投入した。その結果, 社会的望ましさはマスク着用の頻度と関連が見られず($\beta = .024$), 自己の感染予防 ($\beta = .243$), 他者への感染予防 ($\beta = .317$)は依然として有意な正の関連を示した。

2 つの研究で使用された変数間の相関係数

Nakayachi et al. (2020), Sakakibara & Ozono (2020)のマスク着用の理由, 目的に関

する項目の相関係数を Table 3 に示す。Protection と自己の感染予防 ($r = .481$), Prevention と他者への感染予防 ($r = .253$), Norm と規範的影響 ($r = .261$), いずれも類似した概念を測定していながら、その関連は弱あるいは中程度であることが示された。

考 察

本研究では、COVID-19 に対するマスク着用の規定因を検証した国内の 2 つの研究に着目し、それぞれの追試と新たなリサーチクエスションの検証を行うことで、マスク着用の理由を探ることを目的とした調査を実施した。その結果、2 つの研究は概ね再現されること、当初想定されたダブルバーレル、社会的望ましさに起因する結果へのバイアスは、両者の知見の不一致を十分に説明するものではないことが示された。

2 つの研究の追試結果について

元の Nakayachi et al. (2020) とは目的変数、投入された説明変数が異なるものの、本研究においても Norm はマスク着用の頻度と正の関連を示した。この結果は、本研究の調査時期(2020 年 9 月)においても、他者のマスク着用を見ることが自身のマスク着用を促していたことを示唆している。また、元の研究と同じ変数を使用した Sakakibara & Ozono (2020) の追試においても、結果は概ね再現された。ただし、本研究における「自己の感染予防」の標準偏回帰係数は $\beta = .243$ であり、元の研究の $\beta = .164$ よりもやや大きくなっている。この結果は、2020 年 4 月から 9 月にかけて、「自己の感染予防」という理由が、マスク着用をより促すようになった可能性を示唆している。緊急事態宣言直後、人々の危機感は急激に高まったと考えられるが、当時は COVID-19 というウイルスの実態はほとんど明らかにされていなかった。その後、徐々に COVID-19 に関する情報が共有されるに従い、個々人のマスク着用が効果的であるという認識が定着したことで、「自己の感染予防」という理由がマスク着用をより促すようになったと推察される。ただし、本研究では経時的な変化までは実証することができず、これらは推測の域を出ないことから、縦断的なデータ収集を含めたさらなる検討が必要であろう。

本研究から見える「人々がマスクを着用する理由」

Nakayachi et al. (2020) の“perceived norm”という概念は、広く社会的規範を感受することの影響を測定していると推察される。この点を踏まえた上で、Nakayachi et al. (2020) の追試及び RQ1 の検証結果から、他者のマスク着用を目にすることが、自身のマスク着用を促進している可能性が示唆される。本研究の調査時点の 2020 年 9 月では、マスクを着用することが半ば当然のこととして認識されていたが、例えば人が少ない屋外などのように、ときにマスクを着用すべきか否か、迷う状況は存在する。そうした状況においては、他者がマスクを着用しているかという情報が、依然としてマスク着用の

理由として機能していると考えられる。

ただし、Nakayachi et al. (2020)の Norm の項目が、同調のいかなる側面を測定しているのかという点については、議論の余地があるだろう。一般的に同調は、他者の行動を正しいものと見なし、同様の行動をとるよう動機づけられる情報的影響と、他者からの評価や期待に沿う行動をとるよう動機づけられる規範的影響に分けられる (e.g., Deutsch & Gerard, 1955)。改めて Norm の項目を確認すると、「マスクを着用する人」を目にして、「自分もマスクを着用した方がいい」と動機づけられていることから、一見、情報的影響を測定しているようにも見える。しかし、「自分もつけた方がいい」という部分は、他者のマスク着用を目にした上で、なぜそう感じるのかという動機が明記されていないため、その部分を回答者が自由に補完している可能性がある。仮に、「…マスクを着用する人を目にすると、(自分だけ着用していないことで非難される恐れがあるため)自分もつけた方がいいと感じる」という形で補完されていれば、情報的影響というよりは、規範的影響が反映されていると考えるべきだろう。Norm の項目がマスク着用を頑健に予測することからも、この項目が同調のいかなる側面を測定しているのかについて検討していくことで、マスク着用の理由がより明確になるだろう。

また、追試結果と RQ2 の検証により、自分の感染予防、他者への感染予防という理由もまた、マスク着用の頻度を高めることが頑健に示された。Nakayachi et al. (2020)の自己及び他者への感染予防に関する項目とマスク着用に関連が見られないのは、Sakakibara & Ozono (2020)と異なり、客観的なマスク着用の効果について問うものであるからだと考えられる。実際に、Protection と自己の感染予防、Prevention と他者への感染予防の項目間の相関はそれほど小さくなく、両研究で測定していた概念は、必ずしも同一のものではなかったことが示唆される。これらの結果を踏まえると、マスク着用の客観的な効果よりも、マスク着用の本来の目的を訴える方が、よりマスク着用を促すと言えるだろう。マスク着用が既に習慣化されている中、改めてマスクの本来の目的を顧みる機会は少ない。また、マスク着用に伴う息苦しさやコミュニケーションの取りづらさなどにより、マスク着用に対するモチベーションは、今後次第に低下していく可能性もある。そのため、改めて「自分と他者を守るため」という、マスク着用の本来の目的を意識させる呼びかけが、個々人が継続してマスク着用に取り組むモチベーションを維持、向上させる上で有効であると言えるだろう。

一方で、Sakakibara & Ozono (2020)における規範的影響は、追試及び RQ2 を通じて、一貫してマスク着用を予測しなかった。この結果から、他者からの評価や期待を意識させるという呼びかけは、必ずしもマスク着用を促進しないと言える。ただし、項目の平均値は 4.88 であり、7 件法で測定したことを踏まえると、決して低い値とは言えない。マスク着用をめぐる諍いや非難は、個人間あるいは社会におけるマスク着用に関する規範の相違から生じると考えられる。そのため、たとえマスク着用を規定する要因ではなくとも、他者の目を意識してマスク着用をしている人が少なくないことに目を向けると

ともに、個々人が有する規範の理解を促すような取り組みや呼びかけが求められるだろう。

以上より、本研究の結果をまとめると、マスク着用は「自分や他の人の感染を防ぐ」という理由と、「他の人がマスクを着用しているから、自分もマスクを着用した方がいい」という理由によって説明されると言える。また、COVID-19の流行から時間が経つ中で、「自己の感染予防」という理由がよりマスク着用を促すようになった可能性がある。無論、本研究では検討されていない他の理由の存在についても考えていく必要があるが、少なくとも、本研究で示された理由に働きかけることで、今後も継続的にマスク着用を促していくことが可能であるだろう。

本研究の限界

本研究には以下の限界が存在する。まず、一時点の調査によるデータであることから、変数間の因果関係には言及できない。次に、多くの変数が単一の項目によって測定されており、概念の妥当性や信頼性に関する問題が生じている可能性がある。さらに、マスク着用については、あくまで自己報告により測定されており、実際の着用頻度を正確に記録しているものではない。今後は、これらの限界を踏まえ、マスク着用とその理由をより精細に検討していくことが求められるだろう。

利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反事項はない。

引用文献

- Deutsch, M., & Gerard, H.B. (1955). A study of normative and informational social influences upon individual judgment. *The Journal of Abnormal and Social Psychology*, 51, 629-636.
- Eikenberry, S.E., Mancuso, M., Iboi, E., Phan, T., Eikenberry, K., Kuang, Y., ...Gumel, A.B. (2020). To mask or not to mask: Modeling the potential for face mask use by the general public to curtail the COVID-19 pandemic. *Infectious Disease Modeling*, 5, 293-308.
- 増田 真也・坂上 貴之 (2014). 調査の回答における中間選択——原因、影響とその対策—— 心理学評論, 57, 472-494.
- Nakayachi, K., Ozaki, T., Shibata, Y., & Yokoi, R. (2020). Why do Japanese people use masks against COVID-19, even though masks are unlikely to offer protection from

infection? *Frontiers in Psychology*, 11, 1918.

<https://doi.org/10.3389/fpsyg.2020.01918>

小塩 真司・阿部 晋吾・カトローニ ピノ (2012). 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み パーソナリティ研究, 21, 40-52.

Sakakibara, R., & Ozono, H. (2020). Psychological research on the COVID-19 crisis in Japan: Focusing on infection preventive behaviors, future prospects, and information dissemination behaviors. *PsyArXiv*, <https://doi.org/10.31234/osf.io/97zye>

谷 伊織 (2008). バランス型社会的望ましき反応尺度日本語版 (BIDR-J) の作成と信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, 17, 18-28.

1. 調査の実施にあたり、同志社大学の中谷内一也先生、尾崎拓先生、大学院生の皆様と意見交換を行い、貴重なご意見を賜りました。また、尺度の使用にあたり、愛知学院大学の谷伊織先生より有益なご助言を賜りました。記して感謝申し上げます。

2. Nakayachi et al. (2020)の“perceived norm”は、norm という言葉がついていることから、一見、同調における規範的影響を反映したものであるように見える。しかし、この項目が同調のいかなる側面を測定しているかについて、論文内で明確には言及されておらず、また項目内容を確認する限り、規範的影響に特徴的な「他者に受け入れられたい」という動機が、少なくとも明示的には反映されていない。そのため、本研究ではこの項目を広く同調全般を測定している項目と見なすこととした。

3. 本研究のサンプルサイズは、Sakakibara & Ozono (2020)のサンプルサイズ($N = 3892$)と比較すると小さいため、検定力の低下が懸念される。この点について、Sakakibara & Ozono (2020)の追試にあたる、本研究の階層的重回帰分析の Step2 における決定係数($R^2 = .282$)を用い、効果量 f^2 を.393、有意水準を.01 とした検定力の事後分析を行った(分析には G*Power 3.1.9.7 を使用)。その結果、検定力はほぼ 1 となることが示された。この結果から、本研究において検定力の低下に起因する問題が生じている可能性は小さいと考えられるだろう。

Table 1 マスク着用を目的変数とした重回帰分析 (Nakayachi et al. (2020)の追試と RQ1の検証)

	Step1		Step2		Step3	
	β	R^2	β	R^2	β	R^2
年齢	.060 *	.090	-.022	.342	-.022	.440
性別	.165 **		.045		.016	
外向性	-.006		-.020		-.016	
協調性	.017		.017		.012	
誠実性	-.037		-.029		-.019	
神経症傾向	.064 *		.019		.021	
開放性	-.017		-.030		-.015	
マスク習慣	.209 **		.116 **		.069 **	
Severity			.046		.015	
Protection			.045		.016	
Prevention			.015		-.002	
Impulsion			.223 **		.109 **	
Norm			.317 **		.204 **	
Relief			.042		.001	
ダブルバーレル検証項目					.418 **	

** $p < .01$; * $p < .05$

Table 2 マスク着用を目的変数とした階層的重回帰分析 (Sakakibara & Ozono (2020)の追試と RQ2 の検証)

	Step1		Step2		Step3	
	β	R^2	β	R^2	β	R^2
年齢	.060 *	.090	.008	.282	.005	.282
性別	.165 **		.095 **		.090 **	
外向性	-.006		-.022		-.026	
協調性	.017		.002		.007	
誠実性	-.037		-.023		-.023	
神経症傾向	.064 *		.029		.028	
開放性	-.017		-.009		-.006	
マスク習慣	.209 **		.123 **		.123 **	
自己の感染予防			.243 **		.243 **	
他者への感染予防			.320 **		.317 **	
規範的影響			.003		.005	
社会的望ましさ					.024	

** $p < .01$; * $p < .05$

Table 3 2つの研究におけるマスク着用の理由, 目的に関する項目間の相関

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1 Severity									
2 Protection	.156 **								
3 Prevention	.081 **	.456 **							
4 Impulsion	.301 **	.345 **	.195 **						
5 Norm	.207 **	.289 **	.123 **	.497 **					
6 Relief	.202 **	.433 **	.291 **	.473 **	.515 **				
7 自己の感染予防	.232 **	.481 **	.086 **	.428 **	.372 **	.456 **			
8 他者への感染予防	.145 **	.232 **	.253 **	.389 **	.356 **	.283 **	.307 **		
9 規範的影響	-.001	-.012	-.004	-.024	.261 **	.112 **	.064 *	.124 **	
10 マスク着用の頻度	.215 **	.276 **	.151 **	.466 **	.486 **	.370 **	.383 **	.426 **	.057 *

** $p < .01$; * $p < .05$

付録 Nakayachi et al. (2020)及び Sakakibara & Ozono (2020)の関連項目

	項目	変数名
Nakayachi et al. (2020)	あなたがもし新型コロナウイルスに感染したら、症状は深刻なものになると思いますか	Severity
	あなたは、マスクを着用することで新型コロナウイルスへの感染を防げと思いますか	Protection
	感染した人がマスクを着用すると、新型コロナウイルスを他人にうつすのを防げと思いますか	Pretention
	あなたは新型コロナウイルスに対して、「何でもいいから、やれる対策はとりあえずやっておこう」と思いますか	Impulsion
	街中や通勤・通学時にマスクを着用する人を目にすると、自分もつけた方がいいと感じますか	Norm
	マスクを着用していると不安感を和らげられると思いますか。	Relief
Sakakibara & Ozono (2020)	マスクは、自分が周りからウイルスを移されないために着用している	自己の感染予防
	マスクは、自分が周りにウイルスを移さないために着用している	他者への感染予防
	マスクは、他の人から冷ややかな目で見られないために着用している	規範的影響